

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】浅見恵理

【所属】(助成決定時) 総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻

【研究題目】 先史アンデス社会の海岸地域における動植物の利用について
—クーヨ遺跡出土遺物の自然科学的分析—

【研究の目的】

本研究の目的は、古代アンデス文明のなかでも後期中間期(紀元後 1000-1470 年)にペルー中央海岸に興隆したチャンカイ社会の植物利用の解明である。

申請者は 2009 年にチャンカイ谷に所在するクーヨ遺跡の発掘調査を行い、その結果、多量のトウモロコシや豆類等の植物、魚骨や動物骨が出土した。さらに、出土土器の中には内面に炭化物が残存している良好な資料も得られた。その主な出土場所は基壇や住居址であることから、加工・調理した動植物を用いて、何らかの儀礼を執行していた可能性が浮上した。

このような視点に立ち、本研究では出土遺物の分析を行い、実証的なデータを獲得することを目的とする。分析方法は、第一に動植物遺存体の種の同定を行い、第二に自然科学的な分析すなわち放射性炭素年代測定を実施することである。これらの基本データから、先史アンデス社会における動植物の利用法や時期的変遷を明らかにすることが可能となる。

【研究の内容・方法】

〔研究内容〕

中央アンデス地域の植生は高度差により多様である。特に、海岸地域は砂漠地帯であるもののアンデス山脈から太平洋へと流れる川の河口付近は灌漑施設が整備され、農業が発達してきた。独特な生態環境により有機物が残存しやすく、考古遺物も良好な状態で土中に保存されるため、染織品や動植物遺存体が腐朽せずに現在まで残存している。

本研究では、2009 年に実施したクーヨ遺跡の発掘調査で得られた動植物遺存体を分析対象として、海岸地域の植生や動物利用を把握する。まず、動植物遺存体については申請者の肉眼観察により基本的なデータ収集を行った。次に、詳細な種の同定および土器片内部に付着した炭化物の分析は、専門的知識を要するためトルヒーヨ大学の教授に依頼した。また、一部の炭化物資料は放射線炭素年代測定を行った。これらの作業と並行して、ペルーの海岸地域の遺跡から出土した動植物遺存体に関するデータ収集も行い、比較検討の材料とした。

〔研究方法〕

クーヨ遺跡から出土した植物遺存体にはトウモロコシ、綿、豆類、果樹の種子、アシ類等がある。一方、動物遺存体は、骨(人骨・動物骨・魚骨)や貝殻等がみられる。これらの調査は、まず申請者が形態的特徴を把握した後、詳細な分析を専門家へ依頼して種の同定を行った。

土器片内部に付着した炭化物の分析については専門家に依頼し、顕微鏡観察によるデンプン粒の検出から、実際に土器で加工・調理された植物の種類が明らかとなった。さらに遺跡で出土した植物との比較検討を行った。

炭化物資料に関しては、ニュージーランドの研究所に放射性炭素年代測定を依頼し、おおよその絶対年代を把握した。住居址や基壇から良好な保存状態で炭化物が出土しており、各遺構の時期的変遷を知る重要な手がかりとなる。

最終的にこれらの分析結果を総合して、本遺跡でみられる動植物の具体的な種類や利用法を把握し、周辺地域のデータも参照して海岸地域の植物利用の実態に迫る。

【結論・考察】

炭化物資料の年代測定の結果、今回調査した遺構は紀元後約1200年から1470年に利用されたことが明らかとなった。これはチャンカイ文化後期に属する年代である。

植物種の同定結果から、現在クーヨ遺跡周辺で栽培されている植物とほぼ同様の栽培植物が当時も利用されていたことが明確となった。さらに興味深いことに、ほぼ完全な形で出土したトウモロコシはそれぞれ山地と海岸地域にみられる原種であった。この他に出土した多量の芯や粒の形状から、多様な原種が交配され、品種改良が推進されたと推測される。

さらに土器内部の炭化物の分析では、トウモロコシ、ジャガイモ、ユカのデンプン粒が検出された。ユカはトウモロコシと同様に実物も出土しており、重要な食糧源だったと考えられる。

魚介類に関しては、魚骨と甲殻類の分析の結果、現在もペルー沖で獲れる種類であった。1つ例外は、エクアドル沖に生息するスポンディルス貝の存在である。他社会との交易の産物であると推測される。

